
 書 評 ・ 紹 介

Alan Booth, Ann C. Crouter and Michael J. Shanahan (eds.)

*Transitions to Adulthood in a Changing Economy:
No Work, No Family, No Future?*

Westport, Connecticut: Praeger, 1999, ix +285pp.

本書は、1997年10月にペンシルバニア州立大学で開催された家族問題に関するシンポジウムの研究成果をまとめたもので、アメリカにおける若者の成人期への移行をテーマに、経済学、社会学、心理学、人口学など、さまざまな分野の研究者による議論が展開されている。

この世に生をうけた子供が、幼少期、青年期を経て、大人になっていくプロセスは、人間の発達過程としてごく自然なことに思うが、一口に「成人期への移行」といっても、「何をもって大人とするのか?」ということは意外に難しい問題であろう。そのため本書が扱う「移行」も学業の終了、就業の開始、離家、結婚、子の出生など多岐にわたっている。なかでも離家の遅れ、晩婚化の進行、同棲・婚外子の増加といったライフスタイルの変化は、本書の中心的な課題となっている。少子化の進行に伴い、わが国でも離家の遅れや晩婚化の進行といったライフスタイルの変化が人々の関心を集めているが、本書によって得られた知見は、わが国の少子化現象を理解する上でも少なからず参考となるだろう。

本書では若者の「成人期への移行」を具体的に下記の4つのテーマに沿って分析している。(1)業績主義化の影響、(2)家庭環境の果たす役割、(3)青年期における就業経験の功罪、(4)「移行」を難しくしているもの。上記テーマに基づき、本書は4つの部から構成されている。各部には4つの章が収められており、最初の章で各部のテーマに対する回答が提示され、残る3章でそれに対するディスカッションが展開されている。内容を要約すると、第I部では、労働市場の業績主義化により、相対的に未熟な若者にとって早期の経済的自立が困難となったために、離家の遅れ、晩婚化が進行したとの説明がなされている。また第II部では、家庭環境の影響として、一人親世帯、ステップ・ファミリー、夫婦間のコンフリクトの多い家庭で育った子供は、相対的に早い移行を経験しやすいことが指摘されており、続く第III部では、青年期の就業経験が大人の役割の獲得にプラスに働く一方で、問題行動を誘発しやすいことが指摘されている。また第IV部では、教育水準が低いほど、また白人より黒人でキャリア形成に時間がかかり、結果として結婚が遅くなること、黒人女性のAFDC (Aid to Families with Dependent Children, 要扶養児童家庭扶助) への長期的な依存は、彼女の持つスキルのレベルと大きく関わっていることなどが指摘されている。

以上、4つのテーマに対して大まかな回答は用意されているが、その後のディスカッションで様々な問題点が指摘されるなど、問題の奥深さを感じさせる。なかでも業績主義化と成人期への移行の関係を論じた第I部、第IV部では、全体として議論が拡散する傾向にあり、マクロな社会変動からミクロな社会現象を説明することの難しさが窺える。また興味深かったのは、同じ教育水準、出身階層であっても、早期の成人期への移行は、遅い移行に比べて、将来貧困に陥りやすいという1章の結果である。こうした結果から11章では、遅い移行を「社会化の失敗」として捉えるのではなく、移行を成功させるための「適切な段階」として認識する必要があるのではないかとの主張がなされている。

わが国でも若者の離家の遅れは、「パラサイト」という言葉と相俟って、否定的な見地から論じられることが多いが、それが将来の成功のための一つの戦略であるとするならば、「パラサイト」という言葉では語り尽くせない、もう一つの若者像が見えてくるかもしれない。(赤地麻由子)